

〈特集〉飯島渉先生

ある医療社会史研究の軌跡

はじめに

私は、大学二年生だった二〇〇六年に飯島渉先生がご担当した演習形式の授業に参加して以来、修士課程・博士課程に至るまで飯島先生に指導教員を務めていただいた。また、現在は感染症アーカイブズ（AIDH）や科研費のプロジェクトなどで共同研究をしている。

飯島先生は、日本では二〇世紀末に新たな潮流として登場した医療社会史研究をけん引してきた研究者の一人である。ここでの医療社会史（social history of medicine）とは、医学・医療・公衆衛生・病気などに注目して政治・経済・文化・生活などのありようを分析する研究分野である。

このたびの『史友』の企画の一環として、本稿で私は、飯島先生から薫陶を受けた者としてのエピソードを交えつつ、

井上弘樹

飯島先生の主要業績の要点・研究史上の位置づけ・課題を論じる。本稿は、あくまで飯島渉という一研究者の医療社会史研究に焦点をあてるが、それは医療社会史研究の史学史を論じるうえで避けられない作業でもあろう。なお、本稿と関連する医療社会史や医学史（history of medicine）の史学史・研究動向の分析としては、日本語で発表されたものだけでもある程度の蓄積があるので、あわせてご参照いただきたい（例えば、鈴木・二〇〇二、福士・二〇〇二、井本・二〇一一、脇村・二〇一二、鈴木・二〇一四、飯島・二〇一五、飯島・二〇一七、鈴木・二〇二〇、福士・二〇二〇、磯部・二〇二一、廣川・二〇二二など）。

以下、私の元学生としての立場でのエピソード部分を除き、飯島先生の敬称を略す。

医療・衛生事業の制度化と近代性・ベスト

飯島が博士学位請求論文をもとに著した『ベストと近代中国・衛生の「制度化」と社会変容』（研文出版、二〇〇〇年）は、中国や東アジアを対象とした医療社会史研究の先駆的業績である。副題にある「衛生の「制度化」とは、水道整備や労働衛生改善などの衛生事業の導入や近代化を指すだけではない。国家による医療・衛生事業の「制度化」は、「国家医療（state medicine）」や「国家衛生（state hygiene）」として国家（政府）・個人関係の再編や統治機構・民間団体の再編の契機となった（人々の生活への国家権力・統治の浸透、個人の身体の規律化など）。こうした近代国家に特有で共通のあり方（近代性 modernity）があり、本書は、そうした「近代」世界の均質性や同時代性を生み出し支えた制度や仕組み（＝近代性の構造）に注目した。そして、本書は、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてベストが流行するなかで中国も近代国家機構を整備して衛生の「制度化」を志向せざるを得なかったことを強調し、「近代」世界の中に中国を位置づけた。

本書は、医療・公衆衛生に備わる「近代性」（の構造）が、近代の中国や東アジアを論じるうえで魅力的な視点や概念になることを示した。さらに、欧米や中華圏での先駆的研究とあわせて本書は、医療・衛生事業に関わる制度・仕組み・理

念が統治権力の重要な一部を構成し、個人の身体や社会秩序の変容をもたらし、同時に様々なアクターのせめぎあいも生まれたといった視角を、医療社会史研究が共有すること大きく寄与した。

また、本書刊行時の書評でも指摘されている通り、中国の歴史過程に通底する要素（＝変わらぬ中国社会）に注目する議論に対して、本書は近代世界の共通性・均質性となる種の強制性を伴って存在した近代性を強調しており、「近代」世界のなかの中国を論じる意図が明確である。中国における「近代」や「近代性」の内容と意味を問う姿勢は、本書に前後する時期に刊行された他の研究者の研究にも共通している。

さらに、本書では必ずしも明示されているわけではないが、本書は「東アジア近世論」が裏テーマ（？）になるかもしれない。一六世紀から一八世紀に東アジア諸地域が争いと商業のなかで交流と衝突を繰り返しながら、しだいに各々性格の異なる社会を形成したという「近世」論（岸本・一九九八）は、「東アジア」の「近代」をどう理解するかという問いを惹起するものでもあり、本書の問題関心に通じるからである。私が受講していた飯島先生の近現代史の授業でも、「近世」論が幾度か紹介された。ただし、その後の飯島の問題関心は（本書でも示唆されていたが）近代と現代社会の連続的把握

に向かっているようだ。他方、医療社会史研究の文脈では、こうした先行研究を念頭に「東アジアという空間の近世と近代」を通時的に論じることは依然として課題だろう（東アジアという枠組みの是非も含む）。

帝国の学知の形成と展開…マラリア

私は大学二年生時に出席した飯島先生の授業で見たアノフェレス蚊（マラリアを媒介する蚊）の写真が今も印象に残っている。当時の私は歴史の授業に蚊が登場するとは思ってもせず、このような歴史研究があるのかと驚いたことを覚えている（当時の私は飯島先生の研究テーマを知らなかった）。さらに、三年生時の授業では、植民地での医療や公衆衛生の普及は、人々の健康や生活水準の向上に寄与するという単純な構図ではなく、統治権力が浸透する契機にもなったという議論を学び、私は医療社会史に強く惹かれた。

そのころの飯島の主要な研究成果が『マラリアと帝国…植民地医学と東アジアの広域秩序』（東京大学出版会、二〇〇五年）である（二〇二三年に増補新装版が刊行）。本書は、日本、台湾、沖縄・八重山、朝鮮、満洲、中国という広い空間軸と、一九世紀末から二〇世紀後半という長い時間軸を設定して、宗主国が植民地統治の過程で蓄積した医学の体系としての「植民地医学 colonial medicine」の形成、及び植民地医

学や宗主国由来の学知をもとに在来組織・秩序の再編をともなった医療・衛生事業の制度化や実践としての「帝国医療 imperial medicine」の展開、さらには帝国崩壊後のそれらの再編・継承・断絶を詳細に明らかにした。そして、植民地統治における医療・公衆衛生の役割を明快に論じながら、学知の蓄積と展開を諸地域の相互作用・相互連関のもとに示した帝国史研究・東アジア史研究となっている。

本書は、植民地医学・帝国医療をキーワードに諸帝国・地域との比較史の可能性を示した。また、開発原病の議論は環境史や経済史との接点を備えており、植民地統治における医療・公衆衛生の位置づけやその継承と断絶は植民地近代性の議論に通ずる。さらに、研究者の移動、学閥の存在、植民地期台湾から八重山へのマラリア対策の導入と中国大陸での開拓医学の展開といった議論は、植民地科学をめぐる科学史や科学技術社会論（STS）（加藤・一九九八、塚原・二〇一四）と呼応するだろう。こうした点において、本書は、医療社会史研究を隣接領域に向かって開き、その射程を伸ばしたといえる。

エンゼミックとパンデミック…日本住血吸虫症、フィリブア症、COVID-19

二〇〇〇年代後半からは、飯島の研究テーマは日本住血吸

虫症やリンパ系フィラリア症などのエンデミック（地方病）になり、二〇二〇年以降は COVID-19 というパンデミックが加わった（飯島・二〇〇六、飯島・二〇二〇、飯島・二〇二四）。また、これに並行して、飯島は「資料を残す・資料をつくる」という行為そのものに積極的に関わるようになり、歴史学・アーカイブズ学・疫学などの専門家と協同して、学生の協力も得ながら、チームを組んで資料の収集や整理に取り組むようになった（Iijima, Inoue and Ichikawa, 2021）。エンデミックは、特定の地域に流行するローカル性のある感染症である。しかし、飯島のエンデミック研究の特徴は、二〇世紀の約百年という時間軸をとって、国・地域をまたいだ学知の蓄積・交流・継承と断絶や、今日のグローバル・ヘルスとの関わりを論じる点にあり、時空間をめぐるこれまでの研究姿勢は一貫している。これらの研究テーマについては、近い将来にまとまった一書となるのであろう。近代の中国や東アジアの時代性や歴史像を論じてきた飯島は、二〇世紀から COVID-19 が流行する現代にいたるまでを、どのような時代として描くことになるのだろうか。

おわりに

飯島の医療社会史研究は、そのときどきの学界で共有されていた問題関心と自身の研究の位置づけを意識したうえで、

「実証的な手法をもとに時空間的な広がりのある具体的な時代像や地域像」を提示するとともに、「近代性や帝国医療といった応用力のある抽象的な概念や議論の枠組み」を兼ねそろえていた。それは、飯島が医療社会史研究をけん引できた一因だろう。こうして飯島は特に感染症対策に注目して地域秩序や社会秩序の形成と変容をめぐる「大きな枠組み、歴史像」を提示しており、ただしそれゆえに、国家や統治者側が焦点で主要なアクターとなり、ややもすると「上から規定される構造」の揺らぎを捉えがたいという課題が生まれたのだろう。近年、近現代東アジアを対象とした医療社会史研究に限っても研究者は着実に増え、人々の生活、中国医学、民間医療、薬品、急性・慢性の病氣、健康観、表象、言説など多様なテーマと様々な地域を対象とする個別具体的な研究が蓄積されており、そこでは少なからず「下から」や「せめぎあい」や「地域差・多元性・多層性」といった視点から歴史叙述がなされている。ただし、そうした個別事例・個々の経験に対する理解が深まった一方で、それらがより広い時空間的な文脈にどう位置づくのかを問うとき、私たちは依然として飯島が提示した時代像や議論の枠組みにどう応じるかを示さなければならない。

こうしたなかで、展開の可能性はジェンダーとミクロヒストリーにあるかもしれない。これは単に登場人物を増やすと

いうことではない。それにより、歴史像や歴史叙述を多軸的にしたたり、書き換えたりするということである。インターセクショナルティやポジショナルティをめぐる議論の蓄積を踏まえることも私たちには求められている。飯島の「制度化」や「帝国の学知の形成と展開」や「権力」をめぐる議論では、国家や担い手としての男性が焦点になりがちだった。飯島もその点は自覚しており（例えば、飯島・二〇〇〇の終章、飯島・二〇二〇）、飯島が現在進めているCOVID-19研究では「小さな歴史Ⅱ 一人一人の生活」を描くことが必要とも述べているので（飯島・二〇二四）、飯島自身も新たな議論を示すだろう。

このほか、飯島のように単一の疾病に焦点をあてる「垂直的なアプローチ」のみならず、社会における広範な疾病と健康の問題を扱う「水平的なアプローチ」（鈴木・二〇〇八）、ある地域で同時に流行している複数の病気に注目する方法（浜田・二〇二四）、「生存」の仕組みから「時代の特質」を捉える方法（大門・二〇〇八）なども、上述の課題に対して有益だろう。医学哲学・医療社会学・医療人類学などの議論（例えば、ケア、自立、自律、病気観）も、医療社会史研究に直接応用できるとは限らないが、そこで提示される概念や意図あるいは資料の読みには学ぶべき点がある。

最後に、はたして医療社会史研究はどのような時代像や地

域像が描けるだろうか。例えば、医療社会史が「近代」や「現代」を問うときに、第一次世界大戦はどのように位置づけられるだろうか。また、既述のように、「東アジア近世論」の成果を踏まえて、医療社会史研究の文脈で「東アジアという空間の近世と近代」を通時的に論じることが課題だろう。他方、「近世」論それ自体や「東アジア」という概念の是非、そもそも「中国」を「東アジア」という言葉で十分に説明できないという課題をめぐる蓄積もあり、医療社会史研究はそうした議論から知見を得ることができよう。

紙幅の都合により、資料の収集・保全活動、歴史教育、異分野の研究者との共同研究など、本稿では言及できなかったこともある。それぞれ飯島の現在進行形の活動でもあり、その成果が期待される。そして、それらは私たち歴史学に関わる者にとっての課題でもある。

【参考文献】

- ・飯島渉『ベストと近代中国…衛生の「制度化」と社会変容』研文出版、二〇〇〇年
- ・飯島渉『マラリアと帝国…植民地医学と東アジアの広域秩序』東京大学出版会、二〇〇五年（増補新装版、二〇二三年）
- ・飯島渉「宮入員の物語…日本住血吸虫病と近代日本の植民

- ・地医学」田中耕司編『岩波講座「帝国」日本の学知 七
実学としての科学技術』岩波書店、二〇〇六年
- ・飯島渉「『医療社会史』という視角…二〇世紀東アジア・
中国を中心に」『歴史評論』七八七、二〇一五年
- ・飯島渉「感染症と権力をめぐる歴史学」歴史学研究会編
『第4次 現代歴史学の成果と課題 第2巻 世界史像の
再構成』續文堂出版、二〇一七年
- ・飯島渉「『中国史』が亡びるとき…地域史から医療史へ」
研文出版、二〇二〇年
- ・飯島渉「フィリアの制圧と二〇世紀日本の熱帯医学…風
土病の制圧から国際保健へ」秋田茂・脇村孝平責任編集
『MINERVA世界史叢書 八 人口と健康の世界史』ミネ
ルヴァ書房、二〇二〇年
- ・飯島渉『感染症の歴史学』岩波書店、二〇二四年
- ・Iijima Wataru, Inoue Hiroki and Iohkawa Tomoo, "Introducing
activities of the Archives of Infectious Diseases History (AIDH)
project: Historical epidemiology," *Tropical Medicine and Health*,
49-9, 2021
- ・磯部裕幸「制度」としての医師・病院・患者…歴史学的「医
学史」の成果と課題」『歴史学研究』一〇〇四、二〇二二年
- ・井本真理「医療史の可能性…医学史、衛生史からの飛躍」
『文化共生学研究』一〇、二〇一一年
- ・大門正克「序説「生存」の歴史学…一九三〇～六〇年代
の日本」と現在との往還を通じて」『歴史学研究』八四六、
二〇〇八年
- ・加藤茂生「植民地における科学技術の歴史叙述について」
『科学史・科学哲学』一四、一九九八年
- ・岸本美緒『東アジアの「近世」』山川出版社、一九九八年
- ・鈴木晃仁「医学と医療の歴史」社会経済史学会編『社会経
済史学の課題と展望』有斐閣、二〇〇二年。
- ・鈴木晃仁「治療の社会史的考察…滝野川健康調査（一九三八
年）を中心に」川越修・鈴木晃仁編『分別される生命…
二〇世紀社会の医療戦略』法政大学出版局、二〇〇八年
- ・鈴木晃仁「医学史の過去・現在・未来」『科学史研究』
二六九、二〇一四年
- ・鈴木哲造「医療・公衆衛生」日本植民地研究会編『日本植
民地研究の論点』岩波書店、二〇二〇年
- ・塚原東吾「展望…「科学と植民地主義」研究のフロンティア、
ネットワーク・ハイブリッド・連続性などの諸コンセプト
についてのノート」『科学史研究』二七一、二〇一四年
- ・浜田明範「感染症の医療人類学…ウイルスと人間の統治に
ついて」青土社、二〇二四年
- ・廣川和花「日本における感染症史研究の現状と展望」日韓
歴史家会議組織委員会・国際歴史学委員会日本国内委員会

『伝染病と歴史…第二一回日韓歴史家会議報告書』日韓文化交流基金、二〇二二年

・ 福士由紀「中国近代史における衛生研究について…飯島渉著『ベストと近代中国』を中心に」『歴史評論』六二六、二〇〇二年

・ 福士由紀「感染症をめぐる中国近現代史研究」『歴史学研究』一〇〇三、二〇二〇年

・ 脇村孝平「医療・公衆衛生システム…近現代日本における起源をめぐる」社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』有斐閣、二〇一二年

【謝辞】

本研究はJSPS科研費24K15963、23H00020の助成を受けたものです。